

東京分室 PD 個人研究

現代日本における葬送儀礼と
僧侶に関する研究
— 首都圏の事例を中心に —研究代表者・東京分室 PD 研究員 磯部 美紀
(社会学)

本研究の目的は、現代日本の葬儀に僧侶が関与する意味はいかに見出されるのかを宗教社会学的な観点から明らかにすることである。本研究を遂行する上で注目すべきは死別悲嘆である。死別悲嘆をめぐる研究では近年、死者と遺族の関係を再構築し、死者と遺族のつながりを重視することに重きが置かれている。

2023年度は、死者と遺族の関係性再構築を促すナラティブに焦点をあて、僧侶が葬儀の法話において、死者をどのような存在として捉え、いかなるものとして言及しているのかについて、浄土真宗の僧侶への聞き取り調査の結果をもとに検討してきた。研究対象者は、岐阜県西濃地域 A・B 寺住職と千葉県佐倉市 R 寺住職の3名である。なお、分析の過程では、千葉県北総地域周辺の葬祭業者を対象に行ったアンケート調査のデータも補足的に用いた。以下では、その概要を示す。

まずは、各僧侶による死者の言及の仕方を確認していく。R 寺住職は死者について、「諸仏」「お釈迦様の弟子」として、遺族に対して、阿弥陀仏による「教え、願い」、「人生を生きるための教えや願いを……届けてくださる」存在として言及する。A 寺住職は、死者は遺族を「仏さまに導いてくださる案内役」とする。B 寺住職は死者について、生前のかかわりを通して遺族の現在のあり方にも影響を与え、さらに、遺族が「お念仏」に「出遇う」縁をつくる存在であると指摘する。こうした真宗僧侶の語りによって浮かび上がるのは、生者によって弔われるのみの死者像に留まらない、むしろ生者の側に影響を及ぼすような死者の姿である。ここでの死者は、死別後もなお生きていかねばならない遺族に対して、自らの死を通して生きていくことの意味を示す存在として言及されている。また死者は、生前に遺族と交流することによって遺族の過去に影響を及ぼすのみならず、その経験は今の遺族の一部を構成しているとみるならば、遺族の現在にもかかわっていると解釈できる。法話に着目することで、僧侶は死者について、遺族の過去・未来・現在にかかわる存在として言及していることが明らかになった。

また葬儀における法話は、死者と遺族の関係性再構

築を促すナラティブを人々に提供する機会と見なせる。先行研究に示されるように、ナラティブとは、第一に橋をかける行為であり、関係づける作用のことを表す。関係づける上では表現の仕方が重要である。同じ内容を伝えるにしても、理路整然と伝えるのか、あるいは情緒的に伝えるのかで、相手が受ける印象は異なったものになる。葬儀における法話では、死というシビアな事実に対峙する中で、一方では逸話を交えながら、物語的に語ることになる。他方で、説得的に、論理的に言い切る場面もまた、法話の一要素として必要とされる。論理的な考え方を手がかりにすることで、かけがえのない人の死を受容する上でのひとつの見方が立ち現れるのである。法話は、この両者を織り交ぜることにより成立していると考えられる。ナラティブとは第二に、今・ここで構築されていく生ものである。語り手と聞き手の相互行為の結果として生み出される。S 葬儀社社員が語るように、聞き手の状況を顧みない長時間にわたる法話は、聞き手に対して耳を傾けるという行為を諦めさせうる。葬儀における法話は、語り手である僧侶と聞き手である遺族および参列者、さらには死者の存在に影響を受けながら、葬儀の時空間で構築されていくものとして捉えられる。B 寺住職の事例からは、法話の内容は、死者や遺族との対面経験の有無（≡月参りの有無）に影響を受けることが示された。葬儀では総じて法名の意味については言及するものの、死者の人となりと言及するかどうかは、死者や遺族のことをどの程度知っているのかに左右される。また、R 寺住職の事例からは、遺族からの問いかけ（生前の行いが悪かった者が仏弟子になれるのか？）によって、僧侶自身の教義理解が揺るがされ、再考を迫られる様子が見えてくる。葬儀における法話は、その前後関係も含めて見てみると、生ものとしての側面を持つことが分かる。葬儀という現場で今まさに形づくられていく、生の言葉によって伝えられるものであることから、実際の口調や、誰によって発される言葉なのかが重要になる。このように葬儀の法話は、語り手である僧侶と聞き手である遺族と参列者、さらには死者の存在に影響を受けながら、葬儀の時空間で構築されていくものとして捉えられることが指摘できる。

今後の課題は、他宗派の僧侶による法話実践に着目することにより、上記の結果と比較検討を行っていくことである。